

ラマッラー～ナブルス間（パレスチナ自治区）における墓地の考古学的踏査

長尾 琢磨*

Archaeological Survey of Cemeteries in Ramallah-Nablus (Palestinian Territories)

Takuma NAGAO

パレスチナ自治区の考古学的情報、特に第二神殿時代後期の墓地に関しては、他の遺跡と比較して著しく情報が不足しており、十分な調査も成果発表もなされていない。本稿では、この状況をふまえて実施したラマッラー～ナブルス間に位置する5遺跡に関する考古学的踏査の成果を報告する。まず、アブードとキルベト・クルカッシュの墓地は、第二神殿時代後期以降のローマ時代～ビザンツ時代のものである可能性が高いことが明らかとなった。次に、シンジルの墓地は年代が同定困難であり、テル・エン・ナスベ、アイン・シニヤの墓地はすでに失われた可能性もあり、存在が確認できなかった。パレスチナ自治区の大規模な墓地のうち3遺跡がローマ時代以降のものであることから、ラマッラー～ナブルス間に墓地が盛んに作られるようになるのは第二神殿崩壊以降である可能性が高い。

キーワード：パレスチナ自治区、第二神殿時代、ローマ・ビザンツ時代、ロクリ墓、考古学的踏査

There is limited archaeological research or published results on the Palestinian territories, especially in regard to cemeteries of the late Second Temple period, compared to other sites. To mitigate this field surveys of five sites located between Ramallah and Nablus were undertaken. The results show that the Aboud and Khirbet Kurqush cemeteries were most likely dated to the Roman and Byzantine periods, after the Late Second Temple Period. Conversely, the Sinjil cemetery was difficult to date, and the existence of cemeteries at Tell en-Nasbeh and Ain Siniya could not be confirmed. Since three of the large cemeteries in the Palestinian territories are from the Roman period, it is likely that cemeteries between Ramallah and Nablus were not built until after the fall of the Second Temple.

Keywords: Palestinian territories, Second temple period, Roman and Byzantine period, Loculi tombs, Archaeological survey

1. はじめに

本稿では、2018年～2019年にパレスチナ自治区（ヨルダン川西岸地区）のラマッラー（Ramallah）～ナブルス（Nablus）間において、墓地を対象として行った考古学的踏査の成果と考察を述べる。本調査は、筆者が慶應義塾大学塾内研究費補助金を得て、パレスチナ観光・遺跡庁（Ministry of Tourism & Antiquities）の協力のもと行われた。調査に際しては、ジハド・ヤシン氏（Jihad Yasin）（パレスチナ観光・遺跡庁長官）に調査の許可を頂き、アウニー・シャワムラ氏（Awni Shawamra）（同庁職員）とムハンマド・アルセイク氏（Mohammad Alseikh）（同庁職員）と共同で行った。一部の調査に関しては、スフィヤン・イダイス氏（Sufyan Idais）（同庁職員）とフィラス・アケル氏（Firas Aqel）（同庁職員）、シャフィーク・シャバナネ氏（Shafeeq Shabaneh）（同庁

職員）、ムハンマド・ジャラダット氏（Mohammad Jaradat）（同庁職員）、カフル・アカブ市当局、藤田隆太郎氏（慶應義塾大学文学部）に協力して頂いた。

パレスチナ自治政府が文化財を管理するようになったのは1993年のオスロ合意後であり、ユネスコに加盟し世界遺産条約を批准したのは2011年である。そのため、シェケム（Shechem）やエリコ（Jericho）など一部の大型遺跡を除くと、遺跡の保存管理や調査が十分であるとはいえ、現在もパレスチナ観光・遺跡庁により、管轄する地域の遺跡の数や状態を確認するプロジェクトが進められている。パレスチナ観光・遺跡庁には、定期的に独自の雑誌や報告書を刊行する体制がなく、調査成果については、パレスチナ自治区の研究者によってその一部が海外の学術雑誌に報告がなされるか、海外調査隊と共同で学術調査が行われた遺跡であれば、調査隊が所属する大学や研究機関で報

*慶應義塾大学文学部

Faculty of Letters, Keio University

告書や中間報告が刊行されるのみである。パレスチナ観光・遺跡庁がパレスチナ自治区内の遺跡の全容を把握できていないこと、外部への報告がほとんどなされていないことも相まって、パレスチナ自治区の考古学的情報はかなり限られたものであるといえる。

過去の調査やパレスチナ観光・遺跡庁の調査によって、テル型遺跡や教会堂、シナゴグ、十字軍時代の見張り塔などについては情報が蓄積され始めた一方で、墓地に関してはいまだ不明瞭な状況が続いている。墓に関する過去の調査、パレスチナ観光・遺跡庁の調査のほとんどは踏査であり、踏査報告の大半は遺構図面や地理的な情報を欠いているため、墓の存在を示しているのみである。また、パレスチナ自治区の墓は盗掘の被害が甚大であり、多くの墓が封を開けられ、考古学的コンテクストが失われている (al-Houdalieh 2014: 95)¹⁾。そのため、墓に関する発掘調査が行われたとしても十分な情報が得られるとは限らず、得られたとしても、前述のようにその報告がなされない場合がほとんどである。

このような墓地に関する情報の不足は、特に第二神殿時代後期²⁾のユダヤ人の埋葬研究に影響を及ぼしている。イスラエルでは第二神殿時代後期の典型的な石切墓³⁾ (Rock-cut tombs) であるロクリ墓⁴⁾ (Loculi tombs) が多数発見され調査・研究が進んでいる⁵⁾が、パレスチナ自治政府の管理以前に発掘調査が行われたエリコ (Hachlili and Killebrew 1999) 以外は、パレスチナ自治区の墓地はほとんど知られておらず、第二神殿時代後期の埋葬研究の枠組みには含まれていない。しかし、パレスチナ自治区に位置するテル・エン・ナスベ (Tell en-Nasbeh) (McCown 1947)、テル・ベイティン (Tell Beitin) (Kelso 1993) では第二神殿時代後期の居住の痕跡が確認されているため、当時はこれらの町にも墓地は存在していたはずである。実際に、テル・ベイティンそばのワディ・タワヒーン (Wadi Tawahin) に位置する墓地 (杉本ほか 2015) やテル・エン・ナスベの墓地 (McCown 1947) では、少数ながら第二神殿時代後期のロクリ墓が発掘されている。よって、イスラエルとパレスチナ自治区の墓地に関する情報量の差は、当時の状況ではなく現在のパレスチナ自治区の情報不足によるものであり、調査を行うことで改善される可能性が高い。

これらの状況をふまえて、パレスチナ自治区の墓地が第二神殿時代後期のユダヤ人居住域の拡大に伴い構築されたものであるのか、または、後のユダヤ人の離散に伴うものであったのかを明らかにすることを目的とし、複数の墓地において考古学的踏査を行った。本稿では、この結果について報告し考察を試みる。

2. 対象遺跡・調査方法

考古学的踏査の対象とする遺跡を選定するにあたって、パレスチナ観光・遺跡庁のデータベースを参照した。パレスチナ自治政府の管理以前には、イスラエルやヨーロッパの研究者によってパレスチナ自治区の踏査や発掘調査が行われており、この情報はパレスチナ観光・遺跡庁によって把握され、前述のプロジェクトに活用されている。過去の踏査の情報にパレスチナ観光・遺跡庁が行った調査の情報が加えられたものが現在のデータベース⁶⁾である。それによればパレスチナ自治区には約 6000 遺跡が存在するという。ただし、第二神殿時代後期を利用期間に含み且つ墓地を有する遺跡は、そのうち 94 遺跡である。これらの大半は踏査によって墓の存在だけが判明している遺跡であり、墓の年代が遺跡の居住期間のどの部分に属するかは明らかでない。

ロクリ墓は第二神殿時代後期にのみ構築されていたわけではなく、以降のローマ・ビザンツ時代 (前1世紀~後7世紀) においても構築された墓であるため、ロクリ墓の存在は第二神殿時代後期の墓地であることの証明にはならない。このことに加え、これまで述べてきたパレスチナ自治区の墓地に関する事前情報の不足により、調査を行う前に墓地が第二神殿時代後期のものであるかを推定することは不可能であった。よって、本調査では第二神殿時代後期の墓地が既にいくつか確認されているラマッラー~ナブルス間に調査範囲を絞り、第二神殿時代後期の居住があり、且つ墓をともしう遺跡の中で5遺跡を対象とすることとした。具体的には、ラマッラー~ナブルス間で大規模な墓地として知られているアブード (Aboud)、キルベト・クルカッシュ (Khirbet Kurqush)、テル・エン・ナスベ、小規模な墓地の存在のみ明らかであるシンジル (Sinjil)、アイン・シニヤ (Ein Siniya) である (図1)。

調査方法に関しては、全ての遺跡で共通の方法で行った。まず、個々の墓の位置情報を記録した。墓地の存在のみが知られていた遺跡では、まずは墓地の探索を行い、墓地の有無を確認した。位置情報は、GPS/GLONASSウォッチである Suunto Traverse Alpha を用いて記録し、墓以外の遺構 (例えば貯水槽や塔) についても記録することとした。次に、個々の墓の三次元計測を行った。その際は、SfM (Structure from Motion) ソフトウェアである Metashape を利用した。なお、全ての墓で三次元計測を実施することは困難であったため、計測できなかった場合は写真撮影と簡易測量を行った。記録作業の後は、墓内と墓の入口前 (墓外) に区分して土器の表面採集を行い、口縁部や底部であるかに関わらず全て採集した。表採した土器片はパレスチナ観光・遺跡



図1 本報告における対象遺跡

庁の許可のもと日本に持ち帰り、器種や年代について検討した。

3. アブードの墓地

(1) 墓地の概要

アブードは、ラマッラー～ナブルスの中間に位置する小さな町である。パレスチナ観光・遺跡庁の踏査では、十字軍時代の塔やビザンツ時代の教会堂、オリーブプレス、石切場などが確認されており、そのうちビザンツ時代の教会堂の一つであるアブディヤ教会は、パレスチナ観光・遺跡庁によって発掘調査が行われている (Taha 1997)。アブードの墓地は、町の中心部から約1 km 西の谷を越えた丘に位置しており、墓地から町を望むことはできない立地にある (図2)。墓

地の約1 km 北にはイスラエルの入植地であるギヴァット・ハブレハー (Giv'at Haberecha) が位置しているため、パレスチナ観光・遺跡庁による調査はほとんど行われていない。過去にパレスチナ探査基金によって踏査が行われており (Conder and Kitchener 1881-1883: 361-364)、9基の墓の存在と一部の墓のスケッチが掲載されているが、個々の墓の位置や分布、形態など詳細な情報は記録されていない。また、本報告で呼称する Tomb 1、2、6 に関しては、後にマゲンによって踏査・スケッチが行われているが (Magen 2008: 143-149)、同様に分布状況などは記載されていない。パレスチナ観光・遺跡庁が墓地を発見した時には、全ての墓が盗掘されており、遺物も細かな土器片以外は見られなかったようである。

今回の調査では、8基のロクリ墓 (Tomb 1～Tomb 8) が確認された (図2)。これらの墓の多くは石切場の壁面に作られており、石切場の年代は不明であるが、石切場として岩壁が利用された後に墓が作られたと考えられる。Tomb 3や Tomb 4 が位置する岩壁の状況からは、石切場によって元来の地形がかなり改変されていることが読み取れる。元々の地形と石切場による段差を利用して3段に渡って墓が構築されており、最下段はオリーブ畑を作るために破壊・埋め戻しが行われていたため、ほとんど残存していなかった。また、最上段は岩壁の突端部の限られた空間であり、中段が最も墓が作られていた空間であったと考えられる。以下、各墓の詳細について記載する。

(2) Tomb 1、Tomb 2

Tomb 1と Tomb 2 (図3、図4) は、ギリシア建築様式のファサード (Facade)⁷⁾ を共有するアブードの墓地で最も大規模な墓である。ファサードはアンタ (Anta) (付柱)⁸⁾ とフリーズ (Frieze)⁹⁾ によって装飾されており、フリーズは損傷が激しいが、中央部分に柱が存在した形跡は見受けられない。フリーズはメトープ (Metope) とトリグリフ (Triglyph)¹⁰⁾ に区別され、葡萄やロゼット、花輪などの装飾が施されている。ファサードの奥には玄関が設けられ、西には Tomb 1の入口、南には Tomb 2の入口が作られていた。Tomb 2の入口は装飾もなく粗い穴が開けられているだけであるが、Tomb 1の入口は長方形に作られ、葡萄と幾何学模様によって構成された浮彫の枠が施されている。

Tomb 1は、約3 m×3.5 mの口の字型の母室¹¹⁾ を持つロクリ墓である。母室の天井はアーチ状であり、全体に漆喰が塗られフレスコによって装飾されている。フレスコは赤色と黒色の二色であり、ロクリの開口部の上部と側面を装飾している。北壁にはロクリが作られていないが、ロクリの開口部がフレスコとして

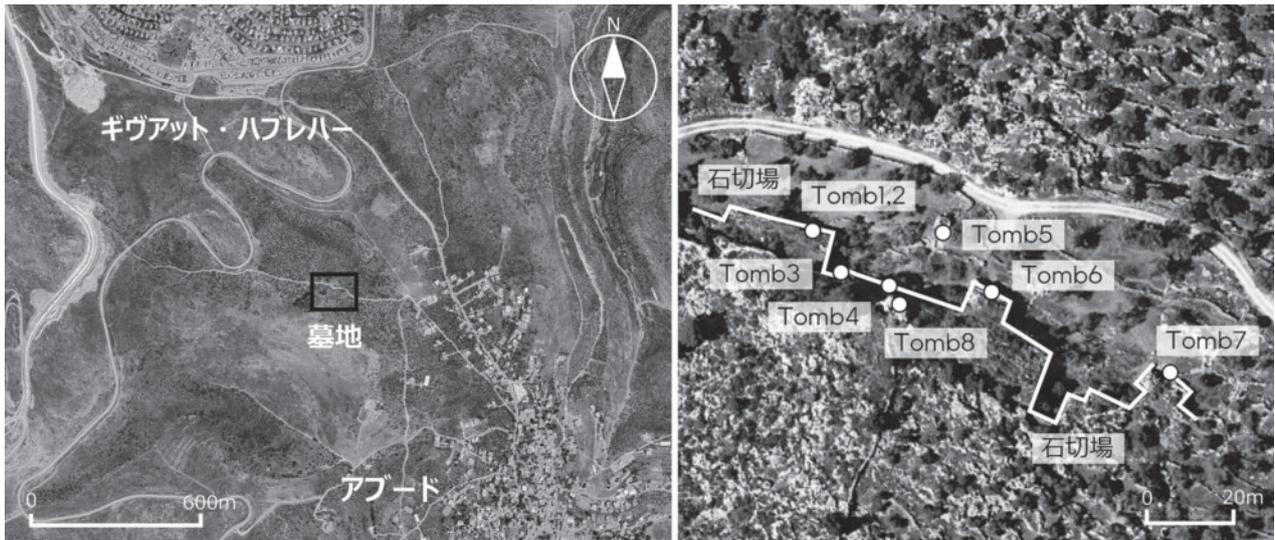


図2 アブードの墓地の立地（左）と墓の分布（右）

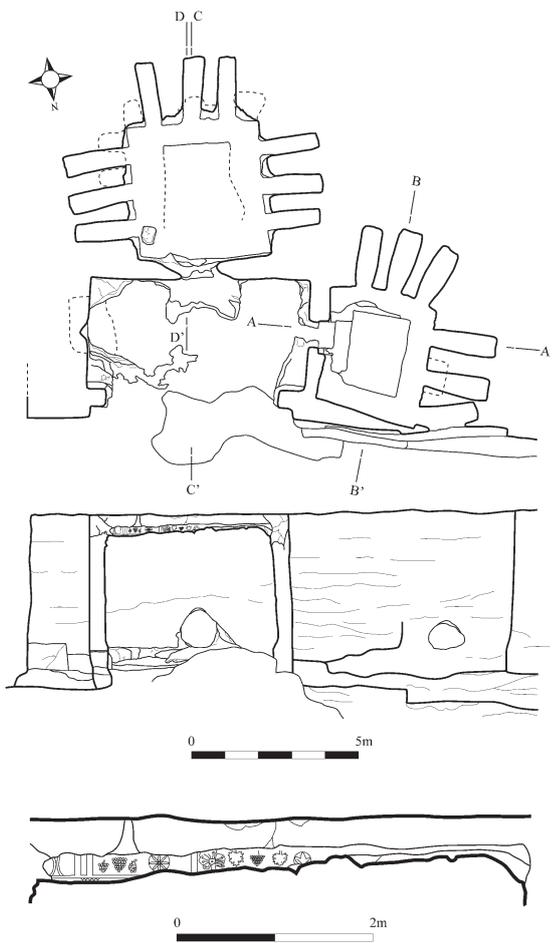


図3 Tomb 1 (右)、Tomb 2 (左) 平面図 (上) と立面図 (下)

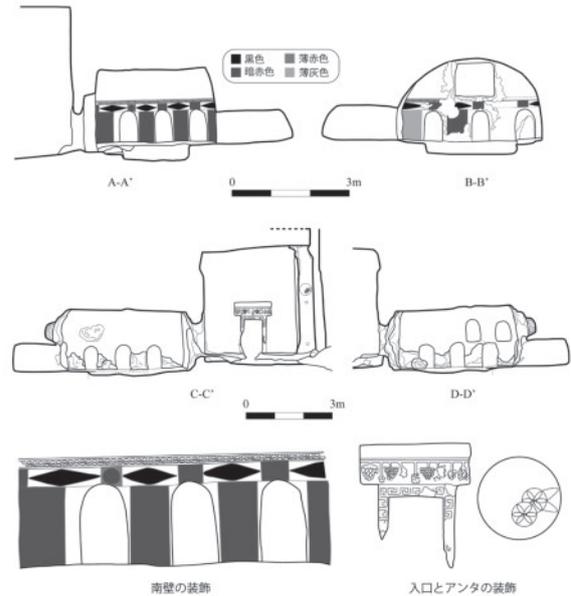


図4 Tomb 1 (上)、Tomb 2 (中) 断面図

描かれ同様に装飾がなされている。フレスコによって装飾がされた墓は、エルサレム (Jerusalem) では1世紀のアケルダマ (Akeldama) (Avni and Greenhut 1996) や5~6世紀の「鳥の墓」(Kloner 1994)、マレシャ (Maresha) 近くでは1世紀のギヴァット・セレド (Giv'at Seled) (Kloner 1991) で確認されており、ローマ時代以降の特徴であると考えられる。母室の南壁・西壁には各3本ずつ標準型や幅広型のロクリが作られ、西壁のロクリの上部にはクアドロソリア¹²⁾が設けられている。アルコソリア、クアドロソリアは、1世紀にエルサレムで利用されるようになった構造であり (Kloner and Zissu 2007: 85-86)、フレスコと同様にローマ時代以降の特徴であ

る。西壁のうち最も北に位置しているロクリは、岩壁に突き当たって穴を開けてしまっており、製作途中に内側に曲げて作られている。精巧な墓であるが、床面には一部崩れている箇所がみられ、石灰分が溶け出したことによってフレスコの一部は破損している。

パレスチナ探査基金による踏査 (Conder and Kitchener 1881-1883: 361-364)、マゲンによる踏査 (Magen 2008) のいずれも Tomb 1 のピットについて言及しておらず、スケッチにも記載されていない。壁面のフレスコのスケッチが掲載されていることから、Tomb 1 の内部が埋まっていたわけではなく、おそらくスケッチや文章を記載する際に省かれてしまっていたのであろう。踏査の記載をみると、明らかにファサードや入口の装飾に重きが置かれ、墓内部の情報に軽視されていたことが伺える。これは Tomb 1 に限ったものではなく、アブードの Tomb 1 以外の墓や他の墓地でも同様の傾向がみられる。このような点からもパレスチナ自治区における踏査の情報を補う必要があると考えられる。

ピット内の残土から 7 点、Tomb 2 と共有する玄関からは 3 点の土器片を採集することができたが、大半が胴部・把手の小さな破片であり、2 点の口縁部も型式が判別できるようなものではなかった。胎土からはローマ時代〜ビザンツ時代の土器片である可能性が高いが、特定の時代に絞り込むことは難しい。

Tomb 2 は、約 4.2 m×3.8 m の母室を持つロクリ墓である。母室の床面には土や岩、壁面から染み出した水が溜まっており、正確な形態を判別することはできなかったが、一部露出していた部分から浅いピットが作られていることが明らかとなった。Tomb 1 と同様に壁面には漆喰が塗られているが、染み出した水によってほとんど破損している状態であった。入口を除いた壁面には各 3 本ずつ標準型のロクリが作られ、東壁と南壁には上部に小型のロクリが作られている。西壁には小型のロクリは作られていないが、同様の位置に掘削した跡があるため、おそらく掘削段階で作業が中止されたのであろう。このような二階層のロクリは例が少なく、エルサレムでは 1 世紀のサンヘドリンの墓のみであり (Rahmani 1961)、上層に小型のロクリが作られる類例はみられない。また、母室の壁面が奥に湾曲するように作られており、下層のロクリの開口部が斜めに作られていることも珍しい特徴である。Tomb 2 の墓内では土器片が確認されず、前述の玄関由来の土器片が関連する遺物である。

(3) Tomb 6

Tomb 6 は、Tomb 1 と Tomb 2 と同様にギリシア建築様式のファサードを持つロクリ墓である。ファサードはアンタとフリーズによって装飾されており、

中央部分に柱が付いていた形跡は見受けられない。フリーズがメトープとトリグリフに区別され、葡萄やロゼット、花輪などの装飾が施されている点も Tomb 1、Tomb 2 と同様である。フリーズの下には石組み壁があるが、パレスチナ観光・遺跡庁によれば近代に追加されたものであるという。ファサードの破損した部分に切り石がはめ込まれていることやコンクリートが利用されていることから、石組み壁が後代のものであることは間違いないであろう。マゲンの踏査時にはファサードの全面が石組み壁で覆われており、中心部に入口が設けられていたが (Magen 2008: 146)、中央部のファサードと石組み壁は盗掘者によって破壊されている。また、ファサードの中央と左のフリーズには重機で削られた跡が残り、現在はその部分の装飾を見ることはできない (図 5a)。

ファサードに続く玄関は、墓の入口の高さまで埋められており、床面は厚さ 3 cm ほどの漆喰で覆われている。墓の入口周辺は、盗掘者によって漆喰の床が破壊されており、現在は土砂が詰められているため、墓内に入ることは難しい状況であった。石組みの壁よりも下に漆喰の床が位置していることから、壁を作る前に漆喰が塗られたと考えられる。石組みの壁と漆喰の床が同時期のものであるかは判別できないが、漆喰の床も墓が放棄された後のものであることは明らかである。マゲンの踏査時には墓内に入ることができたようであり、スケッチによるとピットのない母室の入口を除いた 3 方向に 4 本ずつ標準型のロクリが作られている (Magen 2008: 146)。しかし、マゲンは前述の Tomb 1 の母室に関して、ピットがあるにも関わらずスケッチではピットを描いていなかったため、Tomb 6 についても同様の可能性が考えられる。土器片は確認されなかったが、アンタとフリーズを持つファサードやメトープに施される装飾は Tomb 1、Tomb 2 と共通・類似しており、おそらく同時期の墓であると考えられる。

(4) Tomb 3、Tomb 4、Tomb 5、Tomb 7

これらの墓は、墓内の形態はそれぞれ異なるものの、共通した特徴が確認された。入口にはギリシア建築様式の装飾を持たないアーチ状のファサードが作られており、壁に漆喰は塗られていなかった。また、Tomb 1、Tomb 2、Tomb 6 よりも小型のロクリ墓であった。以下、各墓について記載する。

Tomb 3 (図 5b) は西向きに入口が作られたロクリ墓である。石切場によって作られた岩壁の横側に入口が作られ、Tomb 1、Tomb 2 とは向きが異なっている。ファサードの上部や母室の北壁は破損・崩落しており、おそらく人為的に掘削されたことによって Tomb 3 の北側部分は全面的に破壊されている。母室

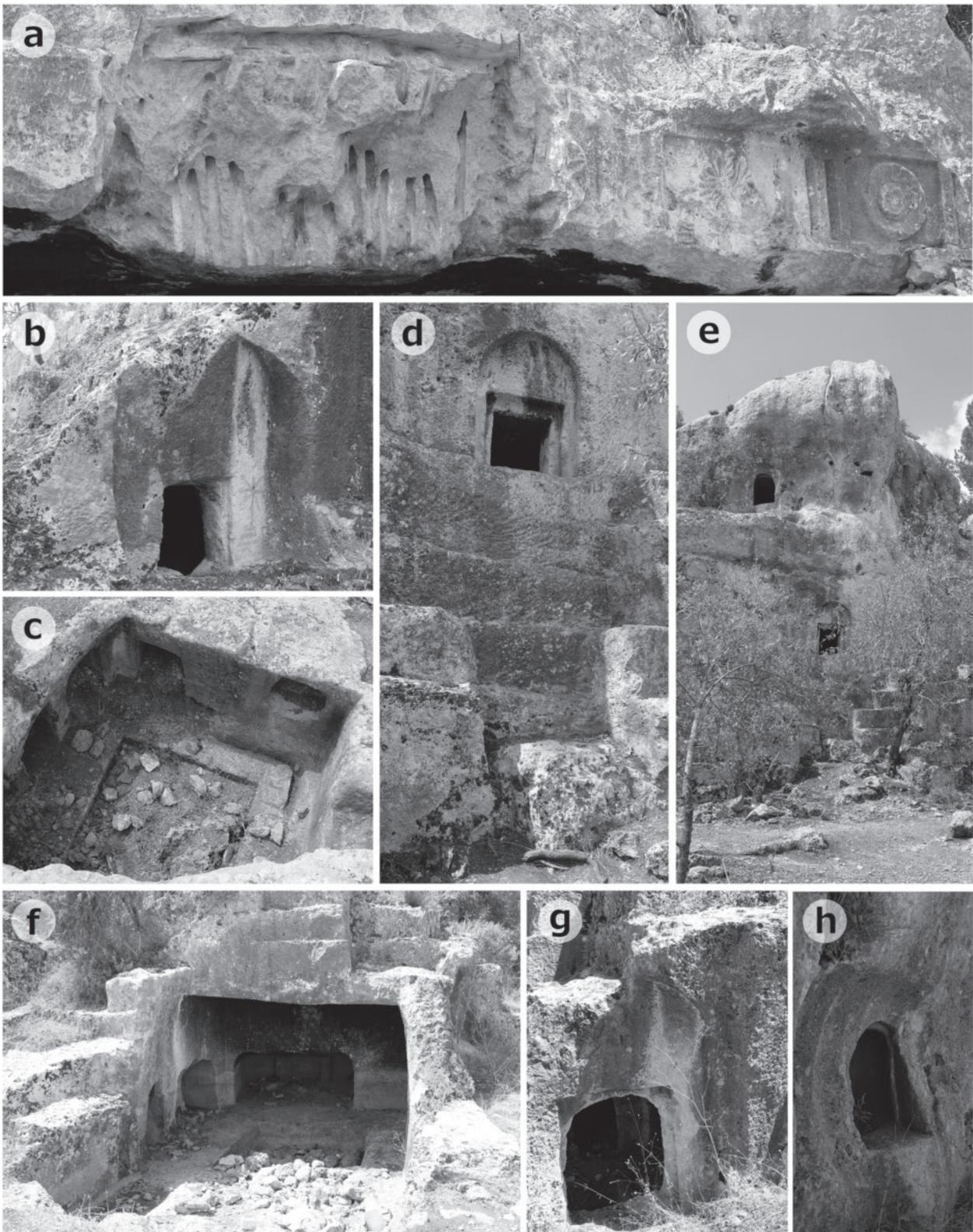


図5 アブードのロクリ墓。(a) Tomb 6の破壊されたファサード、(b) Tomb 3のファサード、(c) Tomb 5の崩落した天井と母室、(d) Tomb 4のファサードと石切場跡を利用した階段、(e) Tomb 8 (上)とTomb 4 (下)の位置関係、(f) Tomb 7北壁の破損状況、(g) Tomb 7のファサードの破損状況、(h) Tomb 8の入口

には崩落した土砂が堆積していたため、Tomb 3の母室の形態は判別できなかった。東壁と南壁には標準型のロクリが3本ずつ作られている。北側の破壊された部分から、土地所有者がごみを捨て焼却しているため、保存状態は悪い。

Tomb 4（図5d）は約2.2m×2.5mの口の字型の母室を持つロクリ墓である。アーチ状のファサードの内側には、さらに四角形の枠が作られている。Tomb 4は、石切場によって作られた段差を階段のように利用しており、墓の入口は地表よりも高い岩壁に設けられている。入口と母室の天井の高さがほとんど同じであり、入口から1mほど下った場所に母室の床面が位置している。東西の壁には1本ずつ、南壁には2本の標準型のロクリが作られている。Tomb 4の母室も破損しており、内部には土砂が堆積しているが、Tomb 3よりも良好な状態であった。母室の残土から3点の土器片を採集することができたが、全て胴部の小さな破片であり、型式が判別できるようなものではなかった。胎土からはローマ時代～ビザンツ時代の土器片である可能性があるが、Tomb 1、Tomb 2と同様に特定の時代に絞り込むことは難しい。

Tomb 5（図5c）は最下段で唯一残存している約2.4m×2.5mの口の字型の母室を持つロクリ墓である。人為的な掘削によって、入口や母室の天井は破壊されており、周辺の地形も平らにならされている。Tomb 5の西側の掘削された岩盤には、別の墓のロクリの痕跡がみられることから、当時は最下段にも複数の墓が作られていたことが推測される。大量の土砂が墓内に流入しているが、床面はある程度露出している状況であった。入口は北向きであり、残存している部分からはアーチ状のファサードの内側に四角形の枠が作られていたことが読み取れる。Tomb 4と同様に、入口と母室の天井の高さがほとんど同じであり、入口から1mほど下った場所に母室の床面が位置している。東壁と南壁には3本ずつ標準型のロクリが作られ、西壁は南側に標準型のロクリ、北側に小型のロクリが作られている。

Tomb 7（図5f、図6）は、Tomb 3と同様に西向きに入口が作られた約2.5m×2.7mの口の字型の母室を持つロクリ墓である。アーチ状のファサードの内側には、さらに四角形の枠が作られているが、大部分が崩落してしまっている（図5g）。墓の北側は完全に崩落しており、ロクリの間の壁も壊れている部分が多い。Tomb 4やTomb 5と同様に、入口と母室の天井の高さがほとんど同じであり、入口から1mほど下った場所に母室の床面が位置している。入口を除いた3方向には、各3本ずつ標準型のロクリが作られている。南北の壁のロクリはロクリ間の壁や天井が崩れてしまっているが、開口部のアーチや壁の跡が残って

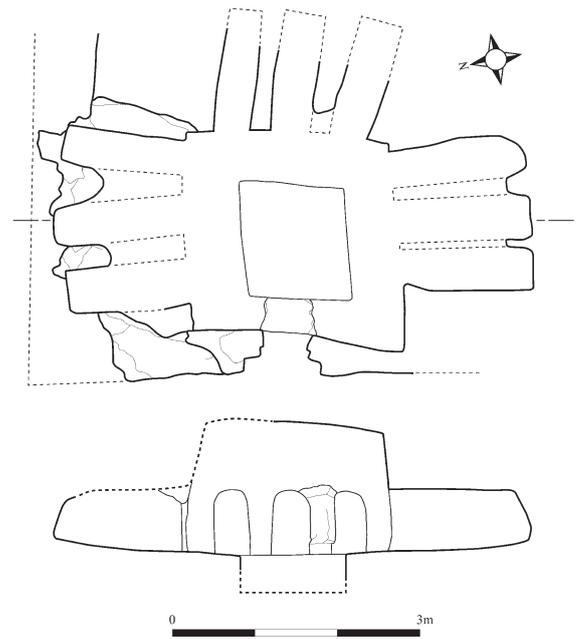


図6 Tomb 7平面図（上）、断面図（下）

いることからロクリと同定することが可能であった。

(5) Tomb 8

Tomb 8（図5h）はこれまでの墓とは異なり、ロクリのみが岩壁に掘られたロクリ単独墓である。Tomb 4の真上、アブードの墓地の最上段に位置しており、石切場として利用されていない岩壁に入口が設けられている。Tomb 8からはアブードの墓地のほとんどの墓を見渡すことが可能であり、東のペタハ・ティクヴァ（Petah Tikva）など遠方の町を望むことができる。このような立地から、Tomb 8は単純な形態に反して有力者の個人墓である可能性もあるが、出土遺物を欠いているため結論付けることは難しい。入口にはアーチ状に枠が作られており、内部にはさらに四角形の枠が設けられている。これらの枠の間の約40cmの空間は左右の壁に窪みがあり、おそらく封石¹³⁾をはめ込むための空間であったと考えられる。アーチ状の枠がある床面から枠の間の床面へは一段下がっており、そこからロクリの内部はさらに一段下がっている。奥部の崩落によってロクリの内部には土が堆積しているため、その床面は露出していないが、ロクリ内部は二層構造であった可能性が高い。

(6) アブードの墓地の年代推定

エルサレムでは、装飾されたファサードを持つロクリ墓のほとんどは、前1世紀半ば以降に構築されたことが明らかになっている（Kloner and Zissu 2007: 51）。ロクリ墓はエルサレムから各地域に広がって

いった墓であるため (Kloner and Zissu 2007: 71)、アブードの墓地がエルサレムに先んじて装飾されたファサードを利用していたとは考え難い。また、1世紀のモデイン (Zissu and Perry 2015: 330-332) とエリコ (Hachlili and Killebrew 1999: 45-50) のロクリ墓では構造物を伴うファサードが確認されているが、ギリシア建築様式の装飾は施されておらず、第二神殿時代後期を通じてギリシア建築様式のファサードを持つ墓はエルサレムに限られる。よって、ギリシア建築様式のファサードを持つ大型のロクリ墓である Tomb 1、Tomb 2、Tomb 6 は、1世紀以降、特に第二神殿時代後期以降のローマ時代～ビザンツ時代の墓であると考えられる¹⁴⁾。

加えて、前述のように、アルコソリア、クアドロソリアは、1世紀にエルサレムで利用されるようになった構造であるが、第二神殿時代後期において、ロクリとこれらが同一墓内で共に利用される事例はエルサレムのみで確認されている¹⁵⁾。ファサードと同様に、アブードの墓地が先に利用していたとは考えられず、クアドロソリアの観点からも、Tomb 1 は第二神殿時代後期以降の墓である可能性が高い。

また、Tomb 3、Tomb 4、Tomb 5、Tomb 7 の共通したアーチ状のファサードを持つ小型のロクリ墓群に関しては、直接的にその年代を示すような根拠は存在しないが、アブードの墓地の特徴的な分布状況から推定することは可能である。アブードの墓の分布は、少数のギリシア建築様式のファサードを持つ大型のロクリ墓があり、その周りに共通したファサードを持つ小型のロクリ墓群が位置するというものである。Tomb 5 の近傍に痕跡が残っているように、おそらく小型のロクリ墓は本来は各段に多数作られ、その数の差はより顕著であったと考えられる。一つの墓域で大半の墓に共通性がみられ、その中に少数の装飾されたファサードを持つ大規模な墓が存在するような事例は少なく、エルサレムでは1世紀のサンヘドリア (Sanhedria) (Rahmani 1961; Kloner and Zissu 2007: 407) にのみ確認されている。少なくとも、墓域内で墓のファサードを共通させるような習慣は、第二神殿時代後期には一般的ではなかったといえる。

ロクリ墓は家族墓または一族墓であり (Kloner and Zissu 2007: 95)、一つの墓域は様々な家族 (一族) の墓の集合体であるともいえる。このような墓域内で、共通するファサードを持ち、墓が規格化されていることは、個々の墓における家族というまとまり以上の共同体の繋がりを感じさせる。墓地における個々の墓に繋がりがあることは、第二神殿時代後期というよりも神殿崩壊以降の状況と合致すると考えられる。神殿崩壊以降は、エルサレム以外の各地にユダヤ人の共同体が成立し、共同体というまとまりが家族以上に

重要視されるようになっていった。ローマ時代～ビザンツ時代初期におけるディアスポラのユダヤ人の墓地であるベト・シェアリム (Beth Shearim) (Weiss 2010) では、共同体としての意識が強まっており、墓は集合してカタコンベを構成し、一貫した形態・装飾で作られている。その中でラビ・ユダ・ハナスィの墓など少数の墓は大規模で装飾が施されており、ベト・シェアリムでもアブードと同様の分布傾向が確認されている。前述のサンヘドリアの事例と神殿崩壊以降の状況から考えると、アーチ状のファサードを持つ小型のロクリ墓群は、Tomb 1、Tomb 2、Tomb 6 と同時期の墓である可能性が高いと考えられる。また、H. タハ (Taha) の報告によれば、アブードの町の踏査ではローマ時代、ビザンツ時代、十字軍時代の考古学的証拠が確認されている一方で、ヘレニズム時代の遺構は確認されていない (Taha 1997: 1)。アブードが居住地として発展していったのは明らかにローマ時代以降であり、墓地の年代推定とは矛盾しないといえる。

一方で、Tomb 8 はこれらの墓群と年代が異なる可能性がある。ロクリ単独墓は第二神殿時代後期に複数の墓地で確認されている¹⁶⁾ が、それ以降には確認されていないためである。ロクリ単独墓については、その分布が特に不明瞭であるため、これを根拠に Tomb 8 の年代を第二神殿時代後期と確定することは難しいが、Tomb 8 のみ立地が特殊であり、唯一石切場跡に作られていない墓であることから、他の墓群よりも年代が遡る可能性が高い。

4. キルベト・クルカッシュの墓地

(1) 墓地の概要

キルベト・クルカッシュの墓地は、ブルキンの約 800 m 東に位置する (図 7)。ブルキンは、アブードの北、ややナブルスよりにある小さな町である。パレスチナ観光・遺跡庁の踏査では、ビザンツ時代の塔や十字軍時代の建造物、石切場、貯水槽が確認されている。ブルキンの町は丘の上部にあり、それを下った位置に墓地が位置しているため、墓地から町を見ることはできない。墓地から約 200 m 北東にはイスラエルの工場が作られており、このような状況からアブードの墓地以上にパレスチナ観光・考古省による調査は行われておらず、墓地で調査を行うこと自体が難しいようである。パレスチナ探査基金による踏査の報告には (Conder and Kitchener 1881-1883: 337-340)、6 基の墓の存在と一部の墓のスケッチが掲載されているが、個々の墓の位置や分布、形態など詳細な情報は記録されていない。Tomb 2 に関しては、イスラエルの研究者であるマゲンによって再度踏査・実測が行われ

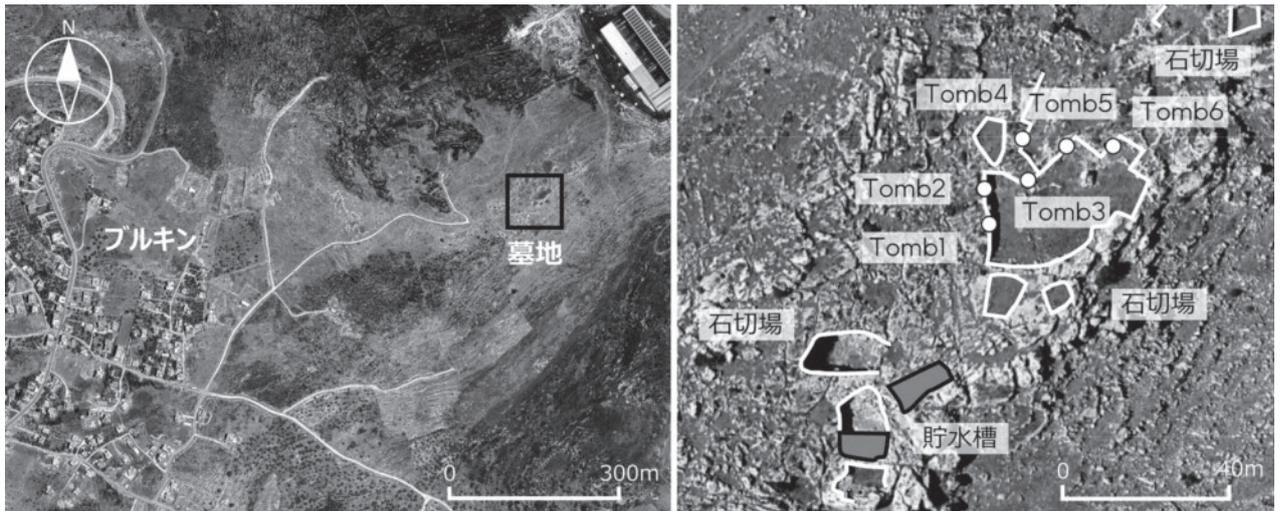


図7 キルバト・クルカッシュの墓地の立地と墓の分布

ているが (Magen 2008: 146-149)、それ以外の墓に関しては報告がなされていない。

本調査では6基のロクリ墓 (Tomb 1~Tomb 6) が確認された (図7)。アブードの墓地と同様に、全ての墓は石切場の壁面に作られており、石切場の年代は不明であるが、石切場として岩壁が利用された後に作られたと考えられる。キルバト・クルカッシュの石切場はアブードよりも規模が大きく、なだらかな丘を横に広く掘削しているため、広範囲に分布している。石切場は複数みられるが、墓地は最も広い石切場の跡に位置しており、墓域が石切場によって四角く区画されているような形になっている。この区画外に墓は分布しておらず、同じ高さに墓はまとめて作られていた。以下、各墓の詳細について記載する。

(2) Tomb 2

Tomb 2 (図8) は、ギリシア建築様式のファサードを持つ、キルバト・クルカッシュで最も大規模なロクリ墓である。ファサードはアンタとフリーズによって装飾されており、付柱間に二柱を配置するもの (distylos in antis)¹⁷⁾ であった。フリーズの中央には、ロゼットや花輪の装飾が施されている。ファサードの奥には玄関があり、南北の壁にはそれぞれアルコソリアが作られている。また、墓の前部の北側にもアルコソリアが設けられている。西側には墓の入口があり、アッティカ式の枠とリントル (Lintel)¹⁸⁾、コーニス (Cornice)¹⁹⁾ によって装飾されているが、コーニスの中央上部は壁龕によって破壊されており、おそらく墓が放棄された後に改築が行われている可能性が高い。墓の入口の南の床面と北の壁面には小さな穴があり、封石をはめる際のストッパーの役割を果たしていたと考えられる。

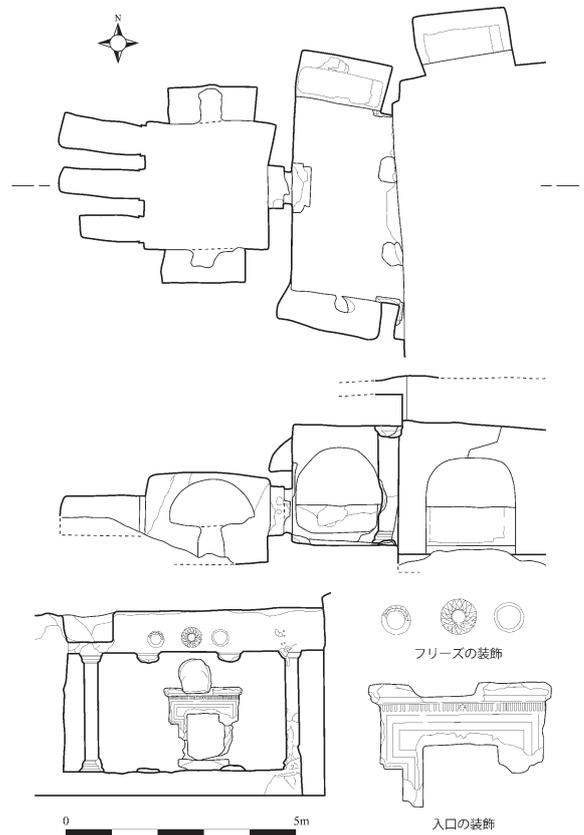


図8 Tomb 2 平面図 (上)、断面図 (中) 及び立面図 (下)

母室は約 2.8 m×2.8 m の平坦型の母室であり、西壁にはロクリが3本、南北の壁にはそれぞれアルコソリアが作られ、その下には小型のロクリが設けられている。アルコソリアの床は破損しており、それによって小型のロクリの天井は崩落していた。一つの母室に対して、墓の内部と外部に多数のアルコソリアが作ら

れるロクリ墓の例は他になく、キルベト・クルカッシュの Tomb 2 に特有の構造であるといえるであろう。墓内の残存状態は良好であるが、西壁のロクリと母室の床面は土砂が堆積しているため、奥部の形態はやや不明瞭である。残土は西側のロクリから流れ込んでいるが、ロクリの奥部は崩落していないため、おそらく盗掘者の掘り残しであると考えられる。床面付近は漆喰が剥げてしまっているが、母室の壁面の漆喰は残存していた。

(3) Tomb 1, Tomb 3~Tomb 6

Tomb 1, Tomb 3, Tomb 4 (図9) は、同一のファサードと内部形態を呈するロクリ墓群である。ファサードは奥行のあるアーチ状であり、墓の玄関を兼ねている。東向きへの入口は装飾のない単純なものであり、入口の前には段差が設けられている。Tomb 3 のファサードの隣には、Tomb 2 と同様に墓外にアルコソリアが作られており、Tomb 3 と合わせて利用されていたと考えられる。全ての墓で母室はアーチ状の天井を持つコの字型であり、ロクリは幅広型である。Tomb 3, Tomb 4 は約 2.3m×2.3m の母室であり、入口を除く 3 方向に各 2 本ずつロクリが作られている。Tomb 1 は横幅が少し狭く約 2.3m×2.1m の母室であり、入口正面に 1 本、左右の壁に各 2 本、ピット内部の壁面の入口側を除いた 3 方向にロクリが 1 本ずつ設けられている。全ての墓で漆喰は塗られておらず、残存状態は良好であるがピット内に土砂が堆積している状況であった。Tomb 1 のように細部の違いはあるが、これらの墓はアブードの墓地よりも画一的に作られているといえるであろう。

また、時間の都合で内部を確認することはできなかったが、Tomb 5 と Tomb 6 (図9) も同様に奥行のあるアーチ状のファサードを持つ墓であった。Tomb 5 のみ、柱と石組みを模した浮彫がアーチ状のファサードに施されている。同様の装飾はこれまで確認されていないが、柱の浮彫は 2 世紀以降に構築されたキルベト・エル・ジャウフ (Khirbet el-Jauf) の Tomb A でも確認されている (Magen 2008: 155)。第二神殿時代後期にはこのような装飾を用いた墓の例は確認されていないため、それ以降の特徴であると考えられる。

(4) キルベト・クルカッシュの墓地の年代推定

Tomb 2 は、ギリシア建築様式のファサードを持つこと、アルコソリアが作られていることから、1 世紀以降、特に第二神殿時代後期以降のローマ時代~ビザンツ時代の墓であると考えられる。また、小型のロクリ墓群に関しては、Tomb 3 のみアルコソリアを伴っており、同墓も Tomb 2 と同時期の墓であるといえる。

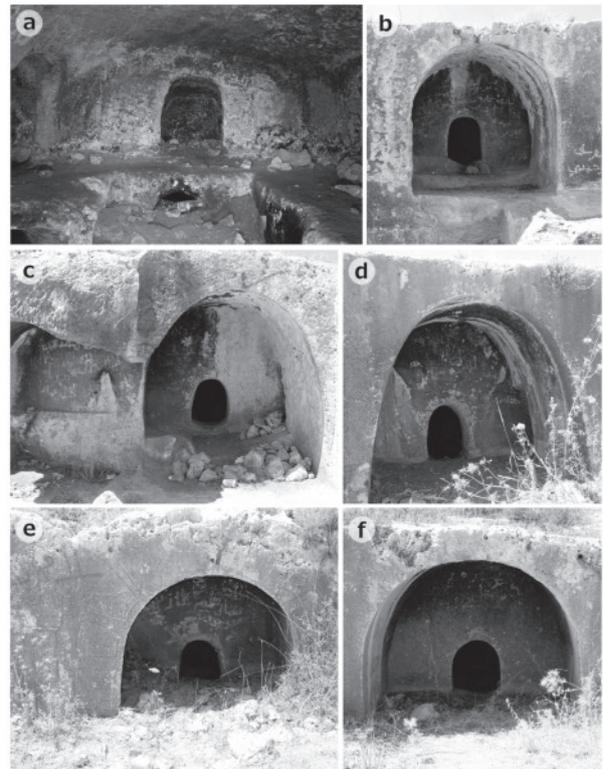


図9 キルベト・クルカッシュのロクリ墓。(a) Tomb 1 のアーチ状の母室とピット内部のロクリ、(b) Tomb 1 のファサード、(c) Tomb 3 のファサードとアルコソリア、(d) Tomb 4 のファサード、(e) Tomb 5 のファサード、(f) Tomb 6 のファサード

キルベト・クルカッシュの墓地では遺物を表採できなかったため、関連する遺物から年代を推定することはできない。

アブードの墓地と同様に、キルベト・クルカッシュの墓地もギリシア建築様式のファサードを持つ大型のロクリ墓と共通したアーチ状のファサードを持つ小型のロクリ墓群が伴っているという分布状況であった。加えて、小型のロクリ墓群はアーチ状のファサード以外にも、アーチ状のコの字型の母室、幅広型のロクリという点でも共通しており、より画一的に作られていることが明らかである。キルベト・クルカッシュの墓地についても、共同体を意識したものであった可能性が高いであろう。このうち、Tomb 3 は前述のようにアルコソリアによって第二神殿時代後期以降の墓であると考えられ、Tomb 5 についても第二神殿時代以降にみられる柱の浮彫といった特徴を持っている。よって、内部形態が明らかでない Tomb 5, Tomb 6 も含め、アーチ状のファサードを持つ小型のロクリ墓群は Tomb 2 と同時期の墓であると考えられる。



図 10 シンジルの墓地の立地と墓の分布

5. シンジルの墓地

(1) 墓地の概要

シンジルは、ラマッラーの約 14 km 北に位置する小さな町である。パレスチナ観光・遺跡庁の踏査では、十字軍時代の塔・教会、モスクが確認されている。シンジルの墓地は、町から約 2 km 北西の丘に一つ目の墓地があり、その約 600 m 南西に二つ目の墓地が位置している（図 10）。町からなだらかな丘を登った上部に墓地が位置しているため、墓地の頂上からはシンジルの町を見ることが可能である。墓地から約 2 km 北西にはイスラエルの入植地であるマアレ・レボナ（Ma'ale Levona）が建造されており、シンジルの墓地はパレスチナ自治区の町とイスラエルの入植地の中間に位置している。盗掘の報告を受けたことによる状況確認のための踏査はパレスチナ観光・遺跡庁によって何度か行われている。しかし、墓地に関して本格的な考古学的調査は行われていない。

本調査は一つ目の墓地を中心に行った。二つ目の墓地については悉皆的な踏査は行っていない。一つ目の墓地では 2 基のロクリ墓（Tomb 1、Tomb 2）と 4 基のシャフト墓（Tomb 3～Tomb 6）が確認された（図 10）。2 基のロクリ墓は同じ斜面に位置しているが、離れた位置に作られている。2 基の間の斜面は、オリーブ畑によって広範囲に地形が改変されており、元々は 2 基以外にもロクリ墓が作られていたと考えられる。シャフト墓は丘の頂上に位置しており、これらもオリーブ畑によってかなり破損していた。二つ目の墓地では 3 基の横穴墓（Tomb 7～Tomb 9）が確認された。いずれも崩落しており、内部の状況を確認することができなかったため、横穴墓の種類は明らかでない。墓地は共に、アブードとキルベト・クルカッシュの墓地よりも残存状況が悪く、盗掘とオリーブ畑

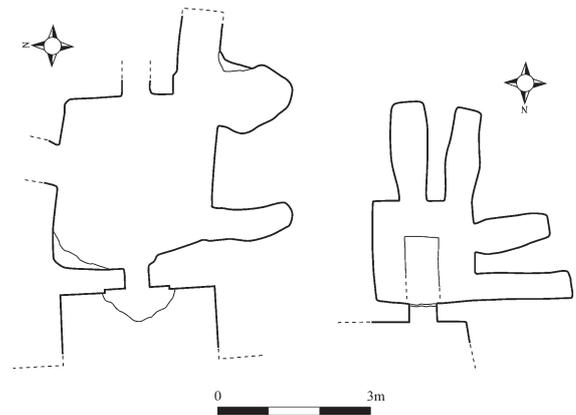


図 11 Tomb 1（左）、Tomb 2（右）平面図

などの現代の土地利用によって損傷を受けている状態であった。以下、各墓の詳細について記載する。

(2) Tomb 1、Tomb 2

Tomb 1（図 11）は、西向きに入口が作られた約 3.8 m×3.3 m の母室を持つロクリ墓である。玄関を有しているが、前面の損傷が激しく装飾のあるファサードを持っていたかは明らかでない。半分ほど土砂が堆積しており、墓の入口も同様に埋まっている。入口はアーチ状の枠によって装飾されており、開口部の周りには四角形の浮彫が施されている。墓の内部は全面的に崩落しており、床面に多量の堆積物があるため母室の形態は判別できない。また、墓の構築当時の壁面はほとんど残っておらず、本来の母室は一回り小さいものであったと考えられる。北壁には 1 本の標準型のロクリ、東壁には 2 本の標準型のロクリ、南壁には 1 本の標準型のロクリと小型のロクリが作られている

が、多くが崩落している状態であった。崩落や浸食の影響もあるかもしれないが、Tomb 1の作りはアブードやキルベト・クルカッシュの墓と比較して明らかに粗雑である。母室の残土から2点の把手、1点の胴部の土器片を採集することができたが、小さな破片であり型式が判別できるようなものではなかった。胎土からはローマ時代～ビザンツ時代の土器片である可能性が高いが、特定の時代に絞り込むことは難しい。

Tomb 2 (図 11) は、北向きに入りが作られた約 2m×2m のコの字型の母室を持つロクリ墓である。十字軍時代の塔の近くの斜面に作られており、岩壁を平らに切り取ったファサードを設けている。ファサードと墓の入口に装飾は施されておらず、土砂が堆積しているため墓の入口は半分ほど埋まっていた。Tomb 1と比較すれば良好であるが、母室の天井や床面、壁の一部は崩落しており、床面には多量の土砂が堆積している。母室の天井は大部分が崩落してしまっているが、南壁に残る部分からはアーチ状の天井であったことが分かる。南壁には2本の幅広型のロクリ、西壁には標準型、幅広型のロクリが1本ずつ作られている。東壁にはロクリが作られていないが、これは墓の東側で岩壁が切れていることが要因であると考えられる。Tomb 1と同様に墓の作りは粗雑であるが、ロクリの壁面を平らに調整している痕跡がみられる。墓の玄関から1点の把手、母室の残土から2点の把手、3点の胴部の土器片を採集することができたが、型式が判別できるようなものではなかった。胎土からはローマ時代～ビザンツ時代の土器片である可能性が高いが、特定の時代に絞り込むことは難しい。

(3) Tomb 3～Tomb 9

Tomb 3～Tomb 6 は、円形の開口部を持つシャフト墓と考えられるが内部の形態は不明である。Tomb 3～Tomb 5は開口部を除いて埋まっており、Tomb 6は開口部の途中から崩落している。また、Tomb 6は、コンクリートで補強されているため、現代に再利用されている可能性がある。第二神殿時代のシャフト墓は開口部が長方形や楕円形であるため (Tal 2003: 290)、これらの円形の開口部を持つシャフト墓の年代は青銅器・鉄器時代 (前3千年紀から前1千年紀前半) まで遡るであろう²⁰⁾。少なくとも Tomb 1 や Tomb 2 と同時期のものではないことは明らかである。

Tomb 7～Tomb 9 は、二つ目の墓地の横穴墓である。一つ目の墓地とは別の丘に位置しており、いずれの墓も崩落や堆積物によって内部の形態を確認することはできなかった。ファサードの装飾もみられず、岩壁に入口が設けられているだけであり、Tomb 1 や Tomb 2 よりも単純な墓であるといえる。横穴墓の種類は判別できないが、その立地から一つ目の墓地と時

期が異なると思われる。

(4) シンジルの墓地の年代推定

シンジルの墓地のロクリ墓は、装飾のあるファサードやアルコソリア、クアドロソリアを持たない一般的な形態のロクリ墓であり、現在得られた情報から年代を推定することは困難である。アブードやキルベト・クルカッシュと比較して、シンジルの墓地は小規模なコミュニティのものであった可能性が高い。Tomb 1、Tomb 2のいずれも表採土器が確認されたが、特定の時代の特徴を示すような土器片ではなく、墓の年代決定に用いることは難しい。シンジルの墓地の2つのロクリ墓の年代については、現状は第二神殿時代後期～ビザンツ時代という広い年代幅で考えるほかない。

また、Tomb 3～Tomb 9 についても、その年代を正確に推定することはできないが、ロクリ墓とシャフト墓、横穴墓でそれぞれ墓が異なる時期に構築された可能性がある。近傍に十字軍時代の塔が位置していることから、シンジルの墓地が位置する丘の利用については複数の時期があることが推測される。

6. 踏査により確認できなかった墓地

(1) テル・エン・ナスベの墓地

テル・エン・ナスベはラマツラーのカフル・アカブ地区に位置する遺跡である。1926年、1935年に F. ベーデ (Bade) によって発掘調査が行われ、鉄器時代の市壁や門、建造物、ヘレニズム時代の市壁や建造物など、青銅器時代からビザンツ時代にかけての遺構が確認されている (McCown 1947)。テルの発掘に伴い、テルの北部・西部の墓地についても発掘調査が行われており、テルと合わせて報告書が刊行されている。テル・エン・ナスベの報告書によれば、鉄器時代のベンチ墓3基、ヘレニズム時代 (前1世紀) のロクリ墓2基、ローマ時代のロクリ墓2基、後期ローマ時代～ビザンツ時代の洞窟墓1基、石棺墓17基、ベンチ墓2基、ロクリ墓2基、アルコソリア墓7基について発掘調査が行われている (McCown 1947: 77-128)。これまでの墓地とは異なり、テル・エン・ナスベの墓地は発掘調査が行われている墓地であり、出土土器やコインによって年代決定が行われている。その一方で、1900年代前半の段階で盗掘の被害があったようであり、一部の墓を除いて出土遺物に乏しい墓が大半であったようである。F. ベーデによる調査の後には、現在に至るまで墓地について調査は行われていないが、西部の墓地の近辺に位置する教会であるキルベト・シュワイカ (Khirbet Shuwayka) はパレスチナ観光・遺跡庁によって発掘調査が行われている。その際に周辺遺跡の踏査が行われたが、テル・エン・ナス

べの墓地の大半は道路工事や宅地造成によって失われてしまったようである。

このような状況から、テル・エン・ナスベの墓地に関しては、F. ベーデによって発掘された墓の現在の状態の確認、未発掘の墓の調査の二つを目的として踏査を行った。テル・エン・ナスベの報告書に示される墓地の位置が曖昧であったため、テル・エン・ナスベの北から西にかけて広いエリアを踏査の範囲とした。踏査の結果として、当時墓地であった場所はほとんど元来の地形を保っておらず、住宅や道路が作られており、残存している墓は一つも確認されなかった。F. ベーデが発掘を行った墓以外にも多数の墓が分布していたようであるが、それらは失われてしまったと考えてよいだろう。F. ベーデの報告の情報から考えれば、テル・エン・ナスベの墓地の主な利用時期はローマ時代～ビザンツ時代であり、アルコソリア墓がビザンツ時代に特有の複数の溝を連ねるタイプ (Kloner and Zissu 2007: 83) であることを考慮すると、第二神殿時代以降が墓地の最盛期だと考えられる。

(2) アイン・シニヤの墓地

アイン・シニヤは、ラマッラーの約 5.6 km 北に位置する小さな村である。パレスチナ観光・遺跡庁の踏査では、ローマ時代のワインプレス、十字軍時代の塔や建造物が確認されている。村の約 1 km 西には丘と深い谷が位置しており、丘の上部には十字軍時代の塔や建造物が広範囲に作られている。アイン・シニヤの墓地は、パレスチナ観光・遺跡庁によってその存在が確認されているが、墓の正確な位置や種類はこれまで調査されていない。

アイン・シニヤの墓地に関して、「十字軍時代の遺構のそばに位置する」という情報しか把握されていなかったため、今回は十字軍時代の遺構が位置する丘の上部から西側を調査範囲として墓の踏査を行った。結果として、アイン・シニヤでは石切墓を確認することはできなかった。オリーブ畑によって土地が改変された影響もあるが、夏季で草が茂り遺構の発見が困難であったことも要因の一つである。地形としては石切墓に適しており、良好な石灰岩の岩盤が地表に露出している。踏査を行った範囲では墓のファサードの残骸や岩壁を垂直に切り出したような痕跡は確認されなかったため、おそらく岩壁に直接入口を設ける簡素な石切墓が中心の墓地であったと考えられる。墓が存在していることは確かであるため、今後さらなる踏査を行う必要があるといえる。

7. 結論

本調査では、ラマッラー～ナブルス間における 5 遺

跡の墓地に関して踏査を行い、失われた、または発見できなかった墓地もあったが、3 遺跡の墓の形態や分布を記録し、年代推定を行うことができた。墓のファサードや内部の装飾、構造、分布状況などから、アブードとキルバト・クルカッシュの墓地は、1 世紀以降、特に第二神殿時代後期以降のローマ時代～ビザンツ時代のものである可能性が高いことが確認された。また、シンジルの墓地は年代推定を行うことが困難であった。

明確に第二神殿時代後期と同定される墓は確認されなかったが、パレスチナ自治区の大規模な墓地のうち 2 遺跡が少なくともローマ時代以降のものであると示すことができたのは重要な点である。かなり幅の広い年代ではあるが、ヘレニズム時代とローマ時代以降を区別できることは、ロクリ墓の広がりを検討することに大きな意味を持つためである。本調査とテル・エン・ナスベの調査成果を合わせて考えると、ラマッラー～ナブルス間に墓地が盛んに作られるようになるのは第二神殿崩壊以降であり、同時期のユダヤ人共同体の広がりと関係していると考えられる。

今後は残る大規模な墓地の踏査が望まれるが、同時に、新たな墓の発掘調査を行う必要がある。本調査でのシンジルの墓地のように、年代推定の根拠となる要素を持たない簡素な墓は、踏査の情報だけではほとんどその年代を明らかにすることができないためである。盗掘された墓であっても、例えばアブードやキルバト・クルカッシュのように、盗掘の際の残土が墓内や墓外に堆積している場合がある。このような残土の発掘を行えば、表採土器よりも良好且つ多量の土器片を得られる可能性が高い。また、堆積物で完全に埋まっている墓であれば、開いている墓よりも遺物が残存している可能性がある。このような発掘調査を行えば、出土遺物に基づいて年代を決定することができる。

また、年代推定可能な墓であっても、現状では第二神殿時代以降ということを判別できるのみで、ローマ・ビザンツ時代という広い年代幅であることは課題である。この解決のためには、前述のように発掘調査を行う必要があるが、盗掘者によって完掘されている墓の場合は異なるアプローチが求められる。例えば、墓地は居住地がなければ成立しないものであり、より調査研究の進んでいる他の遺構の情報を参照することや墓地周辺の遺構の踏査によって居住地の主な利用期間を明らかにすることで、墓地の利用年代を推定できる可能性がある。今後は、本調査で対象とした墓地や新たな墓地の発掘調査、墓地周辺の遺構を含めた広域の踏査を視野に入れ、パレスチナ自治区における墓地の調査を進めていきたい。

註

- 1) 例えば、アル・フーダリエが行ったラマッラー西部地域における踏査では、400基以上の墓が盗掘者によって破壊・略奪されていることが判明している (al-Houdalieh 2014: 104)。
- 2) 第二神殿時代は、バビロニア捕囚からユダヤ人が帰還し、エルサレムに第二神殿が再建されてから、ローマによってエルサレムが陥落するまで (前516年から70年) を指す時代区分である。この期間は支配王朝が頻繁に移り変わる一方で、物質文化はそれに合わせて劇的に変化をしておらず、より広範に文化を捉える括りとして、第二神殿時代という区分は考古学においても一般的に用いられている。本稿でもこれを用い、且つセレウコス朝時代から初期ローマ時代 (前198年~70年) までを第二神殿時代後期と呼称する。
- 3) 本稿では Rock-cut tombs を石切墓と呼称する。岩窟墓と訳されるのが一般的であるが、その場合は自然洞穴を利用した墓も含まれるためである。イスラエル・パレスチナ自治区における石切墓は、岩盤を掘り込んで人為的に作る墓である。
- 4) ロクリとは長さ約2mの遺体や棺を安置するための壁龕である。ロクリが単独で作られることはほとんどなく、方形か長方形の母室に複数掘り込まれることが一般的である。本稿では、入口の次に母室が設けられ、その壁面にロクリが複数作られる墓をロクリ墓、母室を持たずロクリのみが岩盤に作られる墓をロクリ単独墓と呼ぶ。
- 5) エルサレム (Kloner and Zissu 2007)、マレシヤ (Peters and Thiersch 1905; Oren and Rappaport 1984; Kloner 2003)、エン・ゲディ (Ein Gedi) (Hadas et al. 1994)、モデイン (Modi'in) (Zissu and Perry 2015; Tendler et al. 2019) など。
- 6) パレスチナ観光・遺跡庁よりデータベースの基礎データを提供頂いた。一般公開はされていないが、一部の成果は Geomolg に反映されている。Geomolg とは、パレスチナ地方自治体省が地方自治体および市民社会開発プログラムを通じて、ドイツ国際協力公社と共に開発したパレスチナ自治区で最初の統合的空間情報システムである。
- 7) 建築物の正面部分 (入口部分) を指す用語。石切墓においては、墓の入口が設けられる箇所を指す。
- 8) 片蓋柱とも呼ばれる。構造上必要な柱ではなく装飾的に付けられる柱を指す。墓のファサードの場合は、ファサードの両端に付けられる柱がアンタとされる。
- 9) 柱頭の上部に作られる水平に構築される部分はエンタブラチュアと呼ばれ、エンタブラチュアは下からアーキトレブ、フリーズ、コーニスに区分される。
- 10) 垂直方向に取り付けられた飾り板状の部分はトリグリフ、トリグリフの間はメトープと呼ばれる。メトープに装飾が施される場合が多い。
- 11) ロクリ墓の墓内は、入口を入ってすぐの方形・長方形の空間である母室とその壁面に複数作られるロクリに区分される。母室、ロクリはそれぞれ形態にバリエーションがみられ、クロナーとジス、長尾によって分類が行われている (Kloner and Zissu 2007: 61-68; 長尾 2020: 173-176)。本報告では長尾の分類項目にならない、母室・ロクリの形態を呼称する。
- 12) 奥に長いロクリとは異なり、横に長い棚型の壁龕のうち、開口部がアーチ状であるものをアルコスリア (Arcosolia)、四角形であるものをクアドロスリア (Quadrosolia) と呼ぶ。
- 13) 墓の入口を塞ぐための自然石、または加工された石のことを封石と呼ぶ。
- 14) マゲンは Tomb 1 と Tomb 2 の母室の形態と建築装飾か

- ら、これらを第二神殿時代の墓であると同定しているが (Magen 2008: 143-146)、現在の研究では、墓の一般的な形態と建築装飾から年代決定を行うことは不可能である。
- 15) アルコスリアのみで構成されるアルコスリア墓は、1世紀のギヴアット・セレド (Kloner 1991) とホルバト・ラヴニン (Horbat Lavnin) (Zissu 2001) で確認されている。
 - 16) 前2世紀のエン・ゲディ (Hadas et al. 1994)、前1世紀のエリコ (Hachlili and Killebrew 1999)、モデイン (Tendler et al. 2019)、ロシュ・ツリム (Rosh Tzurim) (Peleg and Feller 2004)、 Beit ナティフ (Beit Nattif) (Zissu and Klein 2011)、1世紀のキルベト・エル・クット (Khirbet el-Qutt) (Raviv et al. 2016)。
 - 17) 付柱間に二本の柱を配置する建築様式を distylos in antis と呼び、付柱間に一本の柱を配置する様式を stylos in antis と呼称する。ロクリ墓のファサードには存在しないが、付柱が施されない場合は柱の本数に従って distylos、stylos と呼ばれる。このような様式である場合は、その上部に基本的にエンタブラチュアが作られる。
 - 18) 2つの支柱の上に水平に渡された構造を指す。まぐさとも呼ばれる。
 - 19) エンタブラチュア上方の突起部。
 - 20) ロクリ墓とシャフト墓が隣接している墓地は、ベイティン遺跡 (杉本ほか 2015) に類例がある。ベイティン遺跡ではシャフト墓は移行期青銅器時代 (前2300年~前2000年) のものであり、丘の頂上部に集中して分布している。

参考文献

- al-Houdalieh, S. H. 2014 Tomb Raiding in Western Ramallah Province, Palestine: An Ethnographic Study. In S. W. Crawford and A. Ben-Tor (eds.), *Up to the Gates of Ekron: Essays on the Archaeology and History of the Eastern Mediterranean in Honor of Seymour Gitin*, 95-110. Jerusalem, W. F. Albright Institute of Archaeological Research.
- Avni, G. and Z. Greenhut 1996 *The Akeldama Tombs: Three Burial Caves in Kidron Valley*. Jerusalem, Israel Antiquities Authority.
- Conder, C. R. and H. H. Kitchener 1881-1883 *The Survey of Western Palestine: Memoirs of the Topography, Orography, Hydrography, and Archaeology*. London, Committee of the Palestine Exploration Fund.
- Hachlili, R. and A. E. Killebrew 1999 *Jericho, The Jewish Cemetery of the Second Temple Period*. Jerusalem, Israel Antiquities Authority.
- Hadas, G., A. Sheffer, E. Werker, I. Carmi, D. Segal, B. Arensburg and A. Belfer-Cohen 1994 Nine Tombs of the Second Temple Period at 'En Gedi. *'Atiqot* 24: 1-14.
- Kelso, S. L. 1993 Bethel. In E. Stern (ed.), *The New Encyclopedia of Archaeological Excavations in the Holy Land* 1: 192-194. Jerusalem, Israel Exploration Society & Carta.
- Kloner, A. 1991 A Burial Cave from the Early Roman Period at Giv'at seled in the Judean Shephela. *'Atiqot* 20: 159-163.
- Kloner, A. 1994 The Cave of the Birds - A Painted Tomb on the Mount of Olives. In H. Geva (ed.), *Ancient Jerusalem Revealed*, 306-310. Washington, Biblical Archaeology Society.
- Kloner, A. 2003 *Maresha Excavations Final Report I* :

- Subterranean Complexes 21, 44, 70*, Jerusalem, Israel Antiquities Authority.
- Kloner, A. and B. Zissu 2007 *The Necropolis of Jerusalem in the Second Temple Period*. Leuven, Peeters Publishers.
- Magen, Y. 2008 *Judea and Samaria Researches and Discoveries*. Jerusalem, Staff Officer of Archaeology.
- McCown, C. C. 1947 *Tell en-Naşbeh: Excavated Under the Direction of the Late William Frederic Badè, Vol. 1: Archaeological and Historical Results*. Berkeley and New Haven, The American Schools of Oriental Research.
- Oren, E. D. and U. Rappaport 1984 The Necropolis of Maresha-Beth Govrin. *Israel Exploration Journal* 34: 114-153.
- Peleg, Y. and Y. Feller 2004 Rosh Zurim. *Hadashot Arkheologiyot Excavations and Surveys in Israel* 116. https://hadashot-esi.org.il/report_detail_eng.aspx?id=39. (2023年2月15日閲覧)
- Peters, J. P. and H. Thiersch 1905 *Painted Tombs in the Necropolis of Marissa (Marêshah)*. London, Committee of the Palestine Exploration Fund.
- Rahmani, L. Y. 1961 Jewish Rock-Cut Tombs in Jerusalem. *Atiqot* 3: 93-120.
- Raviv D., B. Har-Even and A. Tavger 2016 Khirbet el-Qutt - A Fortified Jewish Village in Southern Samaria from the Second Temple Period and the Bar Kokhba Revolt. *Judea and Samaria Reseach Studies* 25: 17-35.
- Taha, H. 1997 A Salvage Excavation at the 'Abudiyah Church in Abud. *Liber Annuus* 47: 359-374.
- Tal, O. 2003 On the Origin and Concept of the Loculi Tombs of Hellenistic Palestine. *Ancient West and East* 2/2(2): 288-307.
- Tendler, A. S., S. Terem and V. Eshed 2019 Typical and Atypical Burial in the Late Hellenistic-Early Roman Periods at Horvat Ashun - Modi'in Hills. *Highland's Depth* 9: 15-40.
- Weiss, Z. 2010 Burial Practices in Beth She'arim and the Question of Dating the Patriarchal Necropolis. In J. Magness, S. Schwartz and O. Irshai (eds.), *Follow the Wise: Studies in Jewish History and Culture in Honor of Lee I. Levine*, 207-231. Pennsylvania, Eisenbrauns.
- Zissu, B. 2001 Horbat Lavnin. *Hadashot Arkheologiyot: Excavations and Surveys in Israel* 113: 104.
- Zissu, B. and E. Klein 2011 A Rock-Cut Burial Cave from the Roman Period at Beit Nattif, Judean Foothills. *Israel Exploration Journal* 61(2): 196-216.
- Zissu, B. and L. Perry 2015 Hasmonian Modi'in and Byzantine Moditha: A Topographical-Historical and Archaeological Assessment. *Palestine Exploration Quarterly* 147(4): 316-337.
- 杉本智俊・菊池 実・間舎裕生 2015「二〇一四年度ベイティン遺跡（パレスチナ自治区）における考古学的発掘調査」『史学』84巻1-4号 523-536頁。
- 長尾琢磨 2020「第二神殿時代末期のエルサレムにおける埋葬の変遷—ロクリ墓の形態分析に基づいて—」『オリエント』63巻2号 165-187頁。

